

入 選

無音がきこえる

宮城県仙台第三高等学校 二年 安達 実成

無音がきこえる

無音がきこえる

それは静かな時

突然きこえてくるつんざく音

キーンと耳を貫いていく

痛さと冷たさのか細い音

それはこの静けさを拒絶する

小さな反抗の声かもしれない

無音がきこえる

無音がきこえる

それは音楽をきいた後

清々しい残響

極めて正確に思い出せる

美しい主旋律

それは脳が求めていた

心地よいハーモニーかもしれない

無音がきこえる

無音がきこえる

それは議論をする時

個人の考えが宙を舞い

美しい弧を描いて降ってくる

複雑にもつれあいながら

単純に疾走しながら

それは誰かに伝えたいという

欲求不満なジレンマかもしれない

無音がきこえる

無音がきこえる

それは大失敗をした時

視線が突き刺さる音

意見につぶされる音

自分を自分で笑う声

それは失敗を償おうとする意志

そして慰めを持つ弱い心かもしれない

無音がきこえる

無音がきこえる

それは本を読んでいる時

居るはずのない彼らの声が

活き活きと弾みながらやってくる

気がつけば彼らと本の中へ

本を閉じれば夢物語だと悟る

それは現実世界での迷いが生んだ

新しい世界への分岐点かもしれない

無音がきこえる

無音がきこえる

それは友の表情を見た時

怒りや嫌悪に満ちた目

悲しみと絶望に満ちた目

どれも私を締め付ける

それは友を笑顔にしたいという

優しい心かもしれない

無音がきこえる

無音がきこえる

それはそっと目を閉じた時

ドキドキと高鳴る私のポンプ

静かに動く私の肋骨

常に自分を送り続ける小さな神経

制御しながら私を成長させ続ける

大きな神経

それは少しの振動もきき逃しはしない

顔の両脇にある大切な器官

それは私が生きているという

偽りのない純粋な証拠

無音を、感じよ

無音を、感じよ

(第30回全国高等学校文芸コンクール 詩部門 優秀賞)